

# Rio

今月は…魚

## CONTENTS

- カジカ大卵型
- 籠川・魚もホンソクも育つ川
- アメノウオ釣り
- 今月の一枚
- 新副所長のひとこと
- 調査風景

## カジカ大卵型\*

秦田孝晴

淡水にすむ底生魚の「カジカ」には遺伝的に別種レベルまでわかれたと考えられる3型があり、それぞれ大卵型（本州、四国、九州の河川内で一生を送る陸封型）、中卵型（日本海および瀬戸内海斜面の回遊型）、小卵型（太平洋斜面の回遊型および琵琶湖の個体群）にわけられます。このうち豊田市の矢作川上流域に生息しているものが、ここで紹介するカジカ大卵型です。基本的に夜行性で、日没して暗くなると昼間隠れていた石の下から出て夜明けにかけてエサをとります。主食はヒゲナガカワトビケラやシマトビケラ属、ヒラタカゲロウ属、コカゲロウ属、ユスリカ科幼虫などの水生昆虫ですが、他にカジカ大卵型やタカハヤの稚魚などもとらえて食べるときがあります。繁殖期（2月から5月頃）が近づくと、成熟雄は体が黒くなるとともに第一背鰭の先端部が黄色い婚姻色で彩られ（写真）、雌や未成熟の雄と簡単に区別できます。好適な産卵床が限られている場合には、産卵床獲得をめぐる雄間での競争が強くなります。大型の成熟雄は平瀬の川底にあるおおむね長径30cm以上の石の下のすき間を産卵床として占拠し、複数の雌に求愛して卵を石の下面に付くように産ませた後、卵が孵化するまで産卵床の中で卵を保護します。

近年では生息個体数や分布域の減少が心配され、いくつかの地域では絶滅危惧種（IB類）に指定されています。カジカ大卵型の減少の背景には、水質污染に加えて河道の直線化や護岸、堰の造営など人為活動に伴う生息環境の悪化が深く関わっていると考えられます。本種の産卵場所はほぼ平瀬に限られるため、繁殖期に成熟個体は平瀬を目指して早瀬や淵を越えて移動します。ところが堰などの河川構造物があると、彼ら

の繁殖移動（少なくとも上流方向の）が妨げられてしまう恐れがあります。また河川流域を対象とする工事が年度末におこなわれると、カジカ大卵型の繁殖期と大きく重複するため、本種の円滑な繁殖に支障をきたす恐れが多々あるようです。たとえば関東のある河川では、年度末の護岸工事によって大量の土砂が河川に流入した結果、産卵床として利用可能な石や石の下のすき間の大半が埋まってしまい、産卵をほとんど確認できない年がありました。カジカ大卵型をはじめとする野生動物達は私達に直接文句を言うことはできませんが、生息域や個体数の減少という間接的な形で抗議のサインを送っていると考えられます。現場で調査に携わりながら、彼らからのサインをしっかりと受け止め、さまざまな形で地域の人々に伝えていく必要性を強く感じています。

（なつめだ たかはる、

山梨学院大学商学部 非常勤講師）

\*カジカのうち比較的大きな卵（直径3mm前後）を生むグループ。矢作川では生息数の減少が懸念されている。



# 籠川・魚もカワガキも育つ川

新見 幾男

矢作川支川の籠川<sup>かごがわ</sup>は愛知県豊田加茂建設事務所が管理する一級河川である。延長は11km程だが、その先は豊田市管理の準用河川となって猿投山の南斜面の奥深くまで入っている。

矢作川との合流点（河口から42km）付近の籠川の右岸は豊田市東梅坪町、左岸は同市荒井町である。私は梅坪の集落育ちで、幼児の頃は集落内の農業用水路で水遊びし、小学校へあがる頃から籠川で泳いだり魚つかみをしたりしていた。水泳が一人前になると大川、つまり矢作川本川で泳ぐことを許された。

大川の水は冷たく、長く泳いでいると夏でも寒さでふるえがきた。籠川の温かい水に沈んで身体をあため、また大川にもどって泳いだり魚を釣ったりした。中学校の低学年の頃まで、一夏中大川と籠川で遊んでいた。

大川には漁協の監視がまわってきて、子供の魚釣りも叱っていた。しかし、籠川に逃げ込むと、監視は「そこならいいぞ」と言った。籠川は大きな石のない典型的な砂河川で、アユはいなかった。それで漁協は漁業権を付けておらず、監視の対象外<sup>とあみ</sup>だったのである。大人たちも自由にチンカラ網を張り、投網を打ち、火振りもやっていた。ピンを仕掛けて魚を獲ったり、昼間から毒流しをする人もいた。

籠川下流部は大川につながっていたから、魚の数が多かった。子供も様々な魚を籠川で覚えた。水が温かな浅い川であり、危険はなかった。どんな魚をしても叱られることのない、子供にとっては天国のような川だった。梅坪や荒井などにはそういう育ちをした大人が多いから、大川の網漁禁止期間中にも籠川では堂々と投網を打つ人がいた。今でもそういう大人が生き残っているが、子供の川遊びはほとんど絶えてしまった。

10年程前、矢作川漁協は籠川にも大川並みの漁業権を設定し、その旨の看板を立てた。私は漁協の理事になっていた。組合長や理事は、籠川育ちの大人たちから猛烈な抗議を受けた。漁協と流域社会の間で会談があり、一つの妥協が成立した。

漁協側は、漁業権を使って流域の乱開発を未然に防ぎ、県と協調して魚の棲める川づくりを推進することを強調し、監視は従来通りまわさないことを約束した。大人も子供も遊漁料はタダで、自由な漁を

継続できることが確認されたわけである。

それから10年たって、そうした経過が忘れられてきた。漁業権にもとづく「遊漁規則」は形式的には生きている。投網漁やチンカラ網漁などは、遊漁規則上は大川並に規制されることになる。籠川での「遊漁規則違反」漁業を指摘する声も出てきた。

矢作川漁協は流域社会との約束を守るため、今年3月19日開催の第39回総代会の特別決議で、籠川が「自由漁業」河川であることを再確認した。籠川のような小河川はポンツクやカワガキたちが育つ場所であり、各種魚類が繁殖する場所でもあることを重視する方向で、平成17年度中に、矢作川漁協は流域社会と協議し、新しいタイプの「遊漁規則」を作ることにした。10年前の漁協と流域社会の間の口頭による「妥協」を遊漁規則として文章化するという、前例のなさそうな作業が始まろうとしている。川の関係者のお知恵を拝借したい。

なお、この10年間に事情が少し変わった。漁協が稚魚の遊漁料を本川・支川ともに全面無料化した。アユについても中学生以下は無料化し、18歳までは格安料金にした。県が籠川の魚道整備を続けており、本川・支川の魚類の往来が大きく改善されつつある。

（にいみ いくお、矢作川漁業協同組合長）



筆者が提供したのは小学生らが真っ裸で喜々として魚獲りをしている写真。「絶滅危惧種“スッポンポン”が生き残っていた」という説明をつけたが、研究所側が「市営研究所の出版物に裸はいかがか」と迷い、市広報課に判断を仰いだところ「好ましくない」とされ、このような写真に変わった。籠川という川の開放的で野性的な面白さが伝わってきませんね。

# アメノウオ釣り

神谷 三郎

最近では「アマゴ」という標準和名を使うことが三河地方でも多くなってしまった。土地ことばである「アメノウオ」とか、これを短く「アメ」という人もほとんどいないのだが、私はいつも「アメノウオ」と呼んでいるので、ここでもそう書きたい。

私がアメノウオ釣りを始めたのは、30年近くも前のことで、当時自動車の免許を持っている年齢ではなかったため、単独釣行の場合、電車やバスを利用することが多かった。

矢作川水系の場合は、名倉川が交通の便も良く、少し早起きをして自転車で豊田市駅まで走り、電車で西中金駅へ出て、朝一番の稲武行きのバスに乗り換えると、9時前には川で竿をだすことができた。

場所の移動は徒歩しかないので、夕方の豊田へ帰る終バスの時間を気にして釣っていると、あまり遠くへも行けなかったのだが、それでも魚籠が一杯になってしまい、早目に竿を畳んだりしたことが何度もあった。車を自分で運転するようになってからは、遠出もで

きるようになり、場所の移動も楽にできるのだが、どうも良い場所だけを車で拾い釣りをするというのが好きになれずに、人一倍足を使ってしまうのは、以前に覚えた釣りが身に染み込んでいるせいだと思う。

アメノウオ釣りは他の釣りに比べて、雰囲気<sup>ふんいき</sup>が大事な釣りのような気がするので、時々山を仰いだり、川原の草花に目をやったりする余裕を持ちたい。

さて、アユの遡上<sup>そじょう</sup>が始まり、釣り人の目はアユに向けられがちだが、実に喜ばしいことだ。アメノウオとアユの釣り人は重複している方が多いので、アユよりもアメノウオが好きなのは皆がアユに夢中になってくれることを切実に願うのだ。

嫌な奴<sup>やつ</sup>かもしれないが、天然アユがどんどん遡上して、アユがどんどん釣れれば、上流のアメノウオに見向きする人が減り、私は静かにアメノウオ釣りに没頭できるのだ。だから今年もたくさんアユが遡上するといいと思う。

(かみや さぶろう、矢作川天然アユ調査会 会員)

## 連載 矢作川のいきもの12

### ヒメウラナミジャノメのそらし紋とビークマーク

**鳥** やトカゲなどは、昆虫などを捕らえる場合、眼の位置を考えて攻撃をすることが知られています。眼の位置を見れば逃げる方向が予測できますし、眼をねらえば頭部を攻撃できるので致命傷を与えやすいのです。この攻撃する習性を逆手にとったものが、ヒメウラナミジャノメなどに見られる小さな目玉模様と考えられています。翅(はね)に目玉模様を持つことで、外敵の攻撃をここに引きつけるのです。そのため攻撃をそらすという意味で、この模様は「そらし紋」と呼ばれています。

写真では翅が破れていますが、この破れ方は翅を広げるとほぼ左右対称になります。これはビークマークと呼び、鳥やトカゲなどが翅をついばんだ証拠の破れ方と考えられています。そらし紋のおかげで九死に一生を得たのが、写真のチョウなのです。

(写真・文：吉鶴 靖則)



ヒメウラナミジャノメ 2004年5月1日 豊田市扶桑町

## 新副所長のひとこと



人事異動により今年4月副所長として着任しました倉地と申します。市域が大幅に拡大し、当研究所の使命である矢作川を始め流域の良好な河川環境の維持及び創造を目指すために、調査・研究を進め成果を上げたいと思っています。

今年は、7月に「川の日」ワークショップが豊田市で開催され、矢作川「川会議」やシンポジウムなど諸行事も予定していますので、当研究所の運営も含めて関係者の方々始め多くの皆様方のご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。(倉地)

## みんな川に集まれ!!

矢作川学校 子どもアマゴ釣り大会  
第8回全日本イカダサミット in 矢作川大会  
2005年 矢作川「川会議」

平成17年5月14日(土)「矢作川の日」

### 【越戸公園】

●9:00～12:00  
子どもアマゴ釣り大会

### 【古岸水辺公園】

●14:30～17:30  
シンポジウム  
・第8回全日本イカダサミット in 矢作川大会  
・ディスカッション  
『川で遊ぼう～カワゾーが住む川の風景とは～』  
●17:45～  
セレモニー 陣中太鼓  
●18:00～  
交流会(参加費 1,500円)

## 調査風景

大量遡上時に勢いよく飛び跳ねるアユを、上から捉えました。躍動感ある姿を見ると、調査も楽しくなります。今年もアユが順調に遡上しており、豊漁を期待させます。ここ2年間の4月1日～20日の遡上数は、14,212尾(2004年) 129,471尾(2005年)です。(吉鶴)



宙を舞うアユ(二〇〇四年五月六日)  
豊田市室町 明治用水頭首工魚道

## 研究所PRブースのご案内

愛・地球博期間中、「豊田市インフォメーションプラザ」が設置されます。研究所も、下記日程でPRを行います。

### ◇常設展

活動紹介パネル、標本などの展示を行います。  
5月30日(月)～6月5日(日)

### ◇研究報告

山本研究員による研究報告を行います。  
6月5日(日)  
「アユの生態調査について」



ヤマトタマムシ

※お問合せは矢作川研究所まで



## 編集後記

今月は魚類をテーマにしてみました。矢作川では、カジカやサツキマスなど生息数を大きく減らしてしまった種がいる一方で、ニゴイのように最近になって増えたと聞く魚もいます。この変化の実態を河川調査や聞き取りによって、できる限り記録していきたいと思えます。(山)

## 豊田市矢作川研究所

〒471-0025  
愛知県豊田市西町2-19  
豊田市職員会館1F  
TEL 0565-34-6860  
FAX 0565-34-6028  
e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

